

時代背景に立ち返ることを目指す歴史教育のあり方

学籍番号 199340

氏名 菱木 裕太

主指導教員 山近 博義

1、研究背景と先行研究

現在の学習指導要領の目標とされている、「歴史の展開に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察」(高等学校学習指導要領解説 p200 文部科学省)の部分を育成するには、時代背景に立ち返り考察をする必要があると考える。

時代背景を考察する上で、歴史的思考を重要視したいと考える。歴史的思考の定義づけとしては、S・ワインバーグの定義による4つの観点①史料の厳密な読解と出典の確認②証拠や論拠のある歴史的推論③歴史的文脈への配慮④年代順の思考(『歴史的思考—その不自然な行為—』春風社 2018)をもとに行われた実践(レキシントンの戦い)を原田氏などが分析している。また、永松氏なども学習指導要領をもとに、歴史的思考を具体化し、歴史学習に結び付けていこうとされたものを提示している。

2、実習校での実践とデータの分析

研究は大阪府立Y高校で行なった。2年生を対象とし、科目は日本史Aで5クラス実践を行った。範囲は、自由民権運動と激化事件を実践し、2時間ずつ実施した。

研究目的に基づいた発問を2回行った。1回目は、1時間目の冒頭で時代背景を意識するなどの声掛けは行わず実施した。その後、1回目終了から2回目にかけては、時代背景を意識させる声掛けや考え方の提示を行いながら授業を行い、2時間目の途中で2回目の発問を行った。

授業用のワークシートと別紙で発問用のワークシートを作成し、無記名で回収を行った。無記名で行った意図は、プライバシーに対する配慮と生徒の率直な回答を引き出すためにこのような方式をとった。そして、1回目と2回目の生徒たちの発問に対する回答を比較し分析を行った。

授業中にペアワークを実施していた際に、数人の生徒から時代背景を意識しようとしながら、会話が繰り広げられている様子が確認できた。また、時代背景を意識し思考を働かせる上で、生徒たちに歴史として定説とされる共通理解を獲得させる必要性も見られた。また、実践によって2回の授業で生徒たちの発問に対する答えをデータとして収集することができた。2回の授業のデータをみると時代背景に立ち返ることができていた生徒またはその意識が見られた生徒が増えていたことについては良かったと考える。しかし、約半数の生徒た

ちが立ち返れていない状態であったため、回収したデータを元に具体的な分析・考察を進める。

3、OPPAを通した単元計画と思考の配列

今回の実習を踏まえて、生徒たちが時代背景に立ち返ることができるかどうかを判断することは容易ではない。発問などを織り交ぜて解答を見ている、時代背景に立ち返れているかどうかや、立ち返ることを認知できているかを判断するのは容易ではない。

この点を踏まえて、継続的な実践によって生徒たちが時代背景に立ち返って考えていけるような実践が必要であると考えた。継続的に実践を行っていくために、単元として、思考をどのように配列するかを考察していく。それと同時に、生徒たちに時代背景に立ち返るといふ視点や思考が養われているかを確認することが重要である。そのうえで、診断的評価・形成的評価・総括的評価を行っていく必要がある。そこで、参考としたいのが、堀哲夫氏の著書「1枚ポートフォリオ評価 OPPIA-1枚の可能性」をもとに単元計画をどのようにして行い授業実践を行って行くかということを中心として考察していく。

単元計画を意識した考察については、時代背景に立ち返ることに限らず、歴史的思考という部分においても応用することができる。ワインバーグの研究では、歴史を考える上で思考を分類化し、授業などを通していかにその思考を働かせながら歴史を考えることができるかということを中心として述べられていた。つまり、ワインバーグは提示している4つの思考を同時並行で働かせるべきという主張をしている。たしかに、歴史的思考において、最終的には同時並行で思考を働かせることは必要である。しかし、最初からすべての思考を働かせるということは生徒たちの様子を見た上でも容易ではない。そのため、一つ一つの思考を順番に養っていくという過程が必要である。その思考を養う方法として、単元計画を踏まえた上での思考の配列ということをして行くことが必要であると考えた。そのため、思考をどのように単元配列を行うべきということを中心として考察を進めた。

4、まとめ

今回の実践を踏まえて、いくらかの生徒には歴史という科目が暗記中心の科目ではないという認識がきっかけになったと考える。加えて、時代背景に立ち返って考えるきっかけとなる第一歩を実践することができたということに目を向けると実践したことに対しての効果を見出すことができた。ただ、時代背景に立ち返ることができたというには難しいものであり、継続的に長期間実践を行っていく必要であると分かった。

さらに、1枚ポートフォリオを同時に用いることによって、その効果は相乗できるのではないかという見解に達した。しかし、教員として現場に立った際、仕事量も増えていく中で、1枚ポートフォリオを使いこなすことができるかという部分においては、検討していかなければならない課題であると言える。このようなことを踏まえて、実習校で行った実践を元に、単元計画を意識した実践を行っていきたいと考え